

1 主題構成表

主題名 「真理を探究して生きる」 (中学校・第1学年)

資料名 「土と炎の芸術」 (加藤幸兵衛)

■ 内容項目 A (5)  
「真理の探究、創造」  
真実を大切に、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。

■ 価値の分析

- 人間としてよりよく生きていくためには、真理を大切に、積極的に新しいものを求め、生活を工夫していこうとする意欲を育てることが大切である。
- 中学生の段階では、うそや偽りを憎み、真実を求め、真理を探究しようとする思いが一層強くなる。しかし、学習の成果が出ないことで努力をあきらめてしまったり、流行やうわさ、メディアからの情報に敏感なあまり、真実を確かめようとしないで情報を簡単に信じてしまったりすることもある。
- 指導に当たっては、思い込みによる偏見や先入観にとらわれず探究し続け、多面的・多角的に見ようとする開かれた心や、論理的・批判的に考える姿勢が必要であることなどに気付かせたい。

■ 内容項目から見た生徒の実態

(意識)

- 中学校に入学し、新しい分野の知識や技能を獲得することへの興味・関心が高まっている。
- 疑問を持ち続け、探究し続けていこうとする態度に弱さがみられる。
- メディアから得た情報に頼りがちで、自ら確かめたり調べたりしようとする意識に弱さがある。

(要因)

- 疑問を探究し続けたことで新たな見方や考え方につながった成功体験が少ない。
- 真理を探究することのよさについて実感が弱い。
- 視野が狭く、限られた見方や考え方で物事を判断してしまっている。
- 簡単に答えが出ることに価値を見出し、簡単に答えが出せる方法を求めている。

■ 資料の分析

- 本資料は、中国南宋で作られた青磁に魅せられた加藤幸兵衛が、真理を探究し続け、自分の目指す青磁を創造していく姿が描かれている。
- 5年間探し求めた土で焼いた作品を全部割ってしまう幸兵衛の姿から、真理を探究していく中では、誰もが挫折してしまうことがあるという弱さや、目指す青磁を求め続けていく幸兵衛の素晴らしさに共感することができる。
- 試行錯誤して、思い通りの色を作り出し、見事な青磁をつくり上げたにもかかわらず、「うむ、これからじゃ。まだこれからじゃ。」とつぶやく84歳の幸兵衛の姿から、真理を探究し新しいものを生み出そうとすることが自らの生きがいとなっていることに気付く。

■ ねらい

試行錯誤を重ねつつも妥協することなく、新たな見方や考え方を取り入れながら探究し続けることが自らの生きがいにつながることに気づき、願いの実現に向け、生活の中で工夫して新しいものを生み出そうとする態度を育てる。

■ 展開の構想

- 幸兵衛が自らつくった皿を割る行為について考えさせる中で、仲間の多様な考え方や感じ方に気付くことができるようにする。
- 真理を探究しようとしている生き方に目が向けられるようにする。
- 84歳になってもなお自分が目指すよりよい青磁を求めて探究する幸兵衛の生き方の素晴らしさに気付くことができるようにする。

■ 基本発問 (◎中心発問)

○5年間探し求めた土で焼いた皿を割った幸兵衛をどう思いますか。

◎「うむ、これからじゃ。まだこれからじゃ。」と言いながら、84歳の幸兵衛をなお突き動かしたものは何でしょうか。

○よりよいものをつくり上げようと新たな方法を求めて取り組むことを、今後の自分の生活の中でどのように生かせるでしょうか。

■ 「私たちの道徳」の活用 (授業前・授業中・授業後・活用しない)

(活用の仕方) P34「あなたの夢や理想を実現するために、今どうすることが大切なんだろう」についての考えを書く。

## 2 学習指導過程

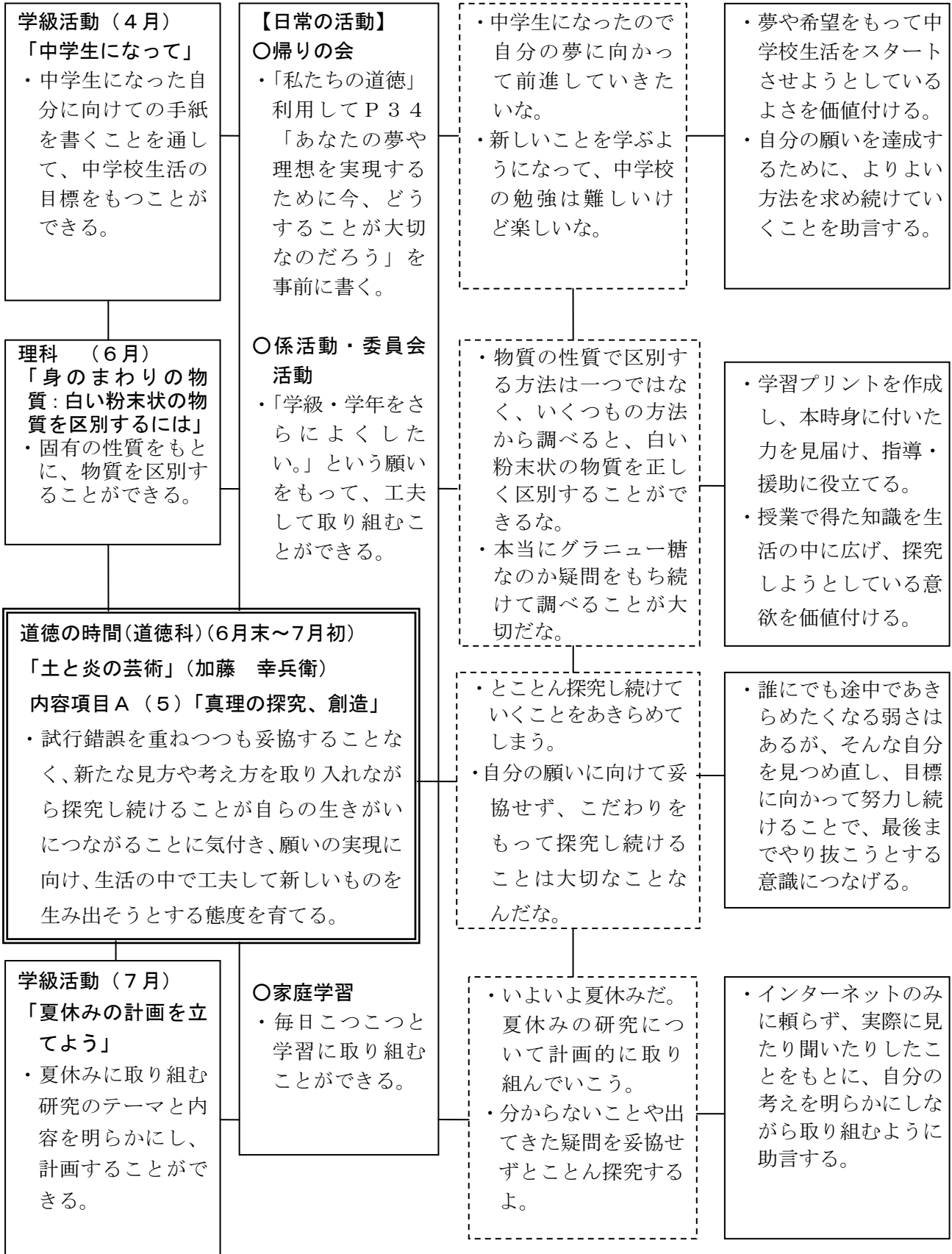
	基本発問と予想される生徒の反応	指導・援助
導入	◇加藤幸兵衛の経歴を紹介し、資料への興味・関心を高めるとともに、価値への方向付けを図る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・加藤幸兵衛氏は多治見市出身の陶芸家で、中国南宋で作られた青磁に魅せられ、この研究に打ち込んだことを確かめる。</li> <li>・略歴と作品の写真を掲示する。</li> </ul>
展開	<p>◇資料提示をし、範読する。</p> <p>○5年間探し求めた土で焼いた皿を割った幸兵衛をどう思いますか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の納得のいく作品ができるまで妥協しない幸兵衛はすごいと思う。悔しい気持ちは分かるけど、自分だったらここまでできない。</li> <li>・まわりも認めてくれてるし、ここまで頑張ったのだから何も割らなくてもよいのと思う。自分だったら、認められたらうれしいし、これでいいかと思うから、なぜ幸兵衛がここまでするのか分からない。</li> <li>・いくらまわりからすごいと言われても、自分が納得いかなかったら、うれしさより悔しさの方が大きい。自分も同じようなことがあったから、皿を割る幸兵衛の行動はよく分かる。</li> </ul> <p>◎「うむ、これからじゃ。まだこれからじゃ。」と言いながら、84歳の幸兵衛をなお突き動かしたものは何でしょうか。(グループ)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分に妥協しない心だと思います。</li> <li>・自分が納得するまでこだわって探究し続けていく気持ちや態度だと思う。</li> <li>・ここまでできたから次はもっとこうしようと、さらに最高のものを生み出そうとする態度だと思う。</li> </ul> <p>(学級全体)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・試合で活躍した時、もっとヒットがたくさん打てるようになりたいと思い、フォームを見直したり、プロ野球を録画して選手のフォームを真似したことがある。考えて練習して打率が伸びたときは、さらにもっと打率を伸ばしたいというやる気がでた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間の多様な考え方や感じ方に触れ、他者理解を深めるとともに幸兵衛が苦しい気持ちに気付くことができるよう、皿を割る行為に対してどう思うかを問うことで、自分と関わらせて発言できるようにする。</li> <li>・「まわりの者から見れば実に見事なできばえに見えるからよいのではないか。」という切り返しの発問によって生徒の心を揺さぶり、妥協せずに真理を探究する幸兵衛の生き方に目が向けられるようにする。</li> <li>・84歳の幸兵衛は、すでに見事な青磁の作品を作り出し、岐阜県重要無形文化財の指定、多治見市名誉市民の称号を与えられていたことを略歴から触れる。</li> <li>・真理を探究し続け、新しいものを生み出そうと努力し続ける生き方のすばらしさに気付くことができるようにする。</li> <li>・グループでの話し合い活動により一人一人の意見を交流した後、学級全体で話し合い、多様な考え方に触れることができるようにする。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p><b>【深めの発問】</b>  <b>★今までの生活の中で、満足できるところまでできているのに、さらによりよいものを目指したいという気持ちで取り組んだことはありますか。</b></p> </div> <ul style="list-style-type: none"> <li>・仲間の意見から、自分の生活の中にもあることだと共感できるようにし、もう一度一人一人が自分自身を見つめる場とする。</li> </ul>
展開後段	<p>○よりよいものをつくり上げようと新たな方法を求めて取り組むことを、今後の自分の生活の中でどのように生かせるか書いてみよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・今日の授業で、幸兵衛の生き方や友達の意見を聞いて、まわりから認められてもさらに自分自身がより高いものを求めていく中で、よりよいものが生まれることを学びました。私は、ピアノ伴奏をしたとき、友達や先生に「上手いね。」と言われて喜んでいただけ、中学校の合唱祭では、みんなの合唱が向上するように、歌いやすい最高の伴奏を求め続けてみたいと思います。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気付かせたい価値の視点から今後の自分を考え、実践への意欲を高める。</li> </ul>
終末	◇本時の授業で自己を深く見つめていた姿を価値付け、教師の喜びでまとめる。	<p>&lt;変容の見届け&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「疑問や興味が湧いたとき、自分が納得するまで探究し続けていきたい。」「探究し続けなければよりよいものは生まれないと気付いた。」など、真理の探究について、自分のこれからの生き方につなげている。</li> </ul>

### 3 道徳の時間（道徳科）と他の教育活動との関連

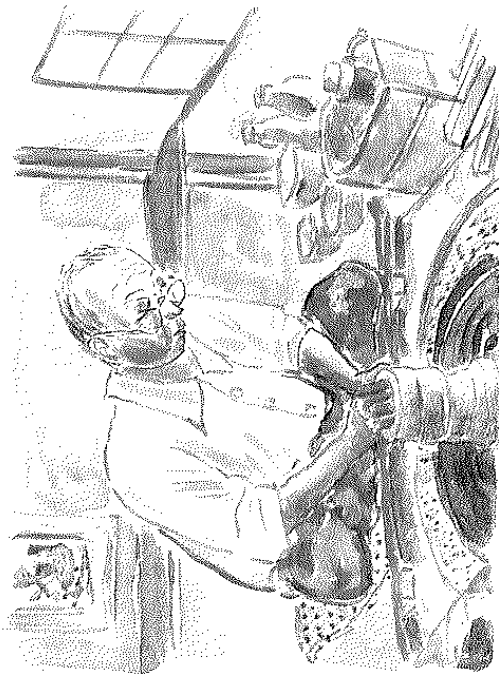
#### <場の内容・ねらい>

#### <生徒の意識>

#### <指導・援助>



## 「土と炎の芸術」 — 加藤 幸兵衛



昭和三十年の秋、五十歳を過ぎた幸兵衛は、一人、多治見市の自宅の庭先に立って空を眺めていた。そこには、どこまでも澄みきった秋の空が広がっていた。「どうしてできないのか。なぜあの色が出ないんだ。青磁は白色ではない。あの、淡い青色はどうしたら出るか…。」

幸兵衛は青磁に取り組んでいた。静かな青みをおびた青磁は、古来、陶磁器の最高峰とされたものである。特に、幸兵衛は中国南宋で作られた青磁に魅せられ、この研究に打ち込んで二十年にもなるのに、自分で気に入った作品が一つもできていない。幸兵衛の心にあせりがあった。

当時、一般の窯でも青磁は焼かれていた。しかし幸兵衛は、最高の青磁を焼くには、もっと適した土があるに違いないと思っていた。青磁を始めたころの五年間は、土を求めて野山を歩き回った。そして、粘土質の土を見つけると必ず持ち帰り、精製して焼いてみた。青磁は生地を薄く堅く焼き上げなければならないため、窯の温度を千二百度にも上げる。すると、とけたり、ひび割れてしまう土、また鉄分が浮き出てくすんだ色に焼けてしまう土もあった。しかし幸兵衛は、山深い小川のほとりから持ち帰った一握りの土が青磁に適していることをつきとめた。焼きあがった皿の形はくずれていない。もちろん、ひび割れもしていない。指先ではじくと、軽い金属音を長く響かせた。「これだ。この土さえあれば、もう九分どおり成功したも同じだ。」と幸兵衛は喜んだ。幸兵衛は心をおどらせ、見つけた所からその土を選び、何日も何日もかかって、もろ（仕事場）の片隅に盛り上げた。その土は手によくなじみ、ろくろの上で次々と皿に形作られていった。もろのたなには薄手の皿が並べられた。

秋も深まったある日、幸兵衛は焼き上がったばかりの皿を一枚一枚取り出して



※<sup>1</sup> 焼き物にぬるうわぐすり

※<sup>2</sup> 粉をまぶしたような青白色

た。それは、まわりの者から見れば実に見事なできばえのように思えた。生地の上のガラス質の釉※<sup>1</sup>は、透明度もあり、青く輝いていた。一枚を指ではじくと軽い金属音が響いた。幸兵衛はその皿をかたわらに置くと、次の皿を取り出しじつと見ていた。また指先ではじめてみた。その皿を前に取り出した皿の上に重ねて置いた。次々と皿を取り出した。

「一枚もない。みんなだめだ。」と、幸兵衛は口の中でつぶやいた。やがて、近くにあつたれんがを手にとると、ものも言わずに一撃を加えた。皿はこつぱみじんに飛び散った。幸兵衛は、気に入った作品でないと全部割ってしまう。もう何度もこんなことをくり返してきた。

幸兵衛は、今回の窯出しでは必ず青磁のあの色が出ると自信を持っていた。だが、自分のめざす美しい粉青色※<sup>2</sup>の青磁は出てこなかった。幸兵衛は激しく打ちのめされた。やつとつかみかけた希望の灯がふつと消えたようなそんな思いが、幸兵衛を苦しめた。

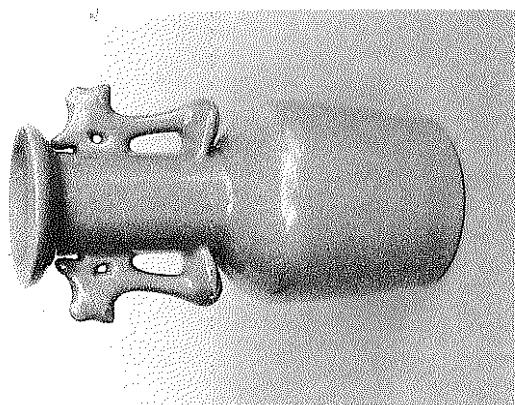
そう思いながらも、中国の古陶器を見ると、幸兵衛の目は輝いた。「これを作ったのはどんな人間か。なぜ自分には、この青磁ができないのだ。この古陶器の中には、まだ知らぬ技法がかくされているにちがいない。」

加藤幸兵衛は、十六歳で家業を継いだ。加藤家は代々この地の陶工で、古くは、江戸の将軍や尾張の徳川家に製品を納めたほどの家柄であつた。だが、父の代に財産を失つて、幸兵衛が引き継いだものは、わずかに古いもろ一棟であつた。しかし、若者らしい一途さで、幸兵衛は家業に取り組んだ。やがて、十年の歳月が流れた。どうにか家業が軌道に乗り、職人も多くなりもろも増した。以前のような活気が戻ってきた。そのころ、美濃焼き職人の中から、日展の工芸部門で入選したものがいた。幸兵衛の心はずんだ。自分もただ茶碗を焼くだけで終わりたくない。美しい、人の心を打つような作品を作りたいと思つた。

それ以降、幸兵衛は、家業のかたわら、陶芸作家としての道を歩みだした。一つの目標ができた幸兵衛は、燃えるような研究心と精魂とを傾けた。

しかし、その幸兵衛が、また、こうして苦悩にあえいでいた。青磁の生地はできたが思うような色が出ない。幸兵衛は皿づくりをやめて、タイルのような板だけを

たくさん作った。その板にあらゆる青磁釉をかけていった。釉薬の成分や濃度を少しずつ変えてみたり、わら灰を混ぜたものを塗ってみたりして、研究に研究を重ねた。その結果、当時、青磁には禁物だとされていた鉄分を微量にふくませた釉薬を、何べんも何べんも重ね塗りすることにより、その色を出すことにとうとう成功したのである。やがて、幸兵衛の窯からは、見事な青磁が次々と生まれ始めた。



加藤幸兵衛作  
「青磁鳳耳花生」

晩年のある日のことである。青磁の大作を作りたいという幸兵衛は、力をふりしぼつてろくろをひき、そして「臙青磁」と呼ぶ鉢のいくつかを窯の中に入れた。家族や職人が「体に悪い、休んでください。」と言っても、三十時間ついに一睡もせず、自分で火の色を見て、温度を調節しながら焼いた。

火を止め、窯の温度が下がってから、窯の口が開けられた。「頼むぞよ。」まわりの者に幸兵衛は声をかけた。作品が取り出された。それをじつと見入った。厳しい顔で無言のままかたわらに置く。しばらくして、また次の作品を取り出す。ふうつと息を吹きかけて、その表面をなでる。ほおがかすかにゆるんだ。手袋を通して伝わるほのかなぬくもりを楽しむかのように、じつと待ち続けていた。

「いかがです、先生。」

弟子の一人が、たまりかねて言った。

「うむ、これからじゃ。まだ、これからじゃ。」

八十四歳の幸兵衛は、もとの厳しい顔にもどつて、こうつぶやくばかりであった。

出典 岐阜県教育委員会 郷土の道徳「郷土史研究にうちこむ」

(平成十三年十一月)